

キャンパスアドバイザー制度の有効性 —導入初年度の省察からの検証—

中村 公子・白川 はるひ・吉川 尚志・苗村 晶彦・村木 桂子・江原 数彦

総合教養センター

はじめに

令和4年度(2022年度)より、戸板女子短期大学では、大学生生活のスムーズなスタートを支援するために学生一人ひとりに教職員が寄り添う「キャンパスアドバイザー制度」を導入した。キャンパスアドバイザーは、新入生の入学時から前期終了時まで、ほぼ全員の職員と共通教育担当教員である総合教養センター所属専任教員が、それぞれ約20名の学生の支援を担当する。これまでは、各学科の専任教員が「クラスアドバイザー」として約40~50名前後の学生の支援を担当していたが、教職員1人当たりの担当学生数を少なくすることで、新しい生活に慣れるための特別な支援を必要とする新入生に対しよりきめ細やかな学生支援を行うこと、また、これまでクラスアドバイザーを担当してこなかった職員と総合教養センター教員をアドバイザーに置くことで、全学をあげての学生支援体制を整えることとした。キャンパスアドバイザーは、個別面談やグループ面談、必修授業「戸板ゼミナール」における産学連携プロジェクトでの学習支援、メールでの連絡等を通じて、何をどこに相談したらよいかわからない新入生に対してささいなことでも気軽に相談しやすい安心できる環境を提供すること、チャレンジを応援する土壌をつくること、また、授業出欠席の管理・連絡、課外活動の情報提供、友人作りの機会創出などを行うことなどを目指した。そして、こうした取り組みを中退予防につなげることも目的のひとつとした。

文部科学省の調査(2022)によれば、短期大学を含む全国の国公私立大学及び高等専門学校は令和元年度、2年度、3年度それぞれの中退率は2.50%、1.95%、1.95%であり、中退者数は同じく、74,129人、57,913人、57,875人で、毎年度約6万人~7万

人の学生が中退をしている状況である。令和2年度と3年度は、新型コロナウイルス感染症蔓延前の令和元年度よりも数値が下がっているが、新型コロナウイルス感染症を理由とした中退者数の割合は、0.07%から0.09%、人数にして2,024人から2,738人と若干の増加を示している。同調査では、令和3年度の中退理由としては、「その他」を除けば「転学等」が一番多く16.3%で、以降、「学生生活不適応・修学意欲低下」15.7%、「就職・起業等」14.3%、「経済的困窮」13.5%と続く。これは選択肢の単一選択による大学側の回答であるため、大学中退者自身が複数回答可で回答した2016年の調査結果を見てみると(19歳から45歳までの中退者本人がweb上で回答)、中退理由の第一番目は「勉強に興味や関心が持てなかったから」で65.9%、「あてはまる」、「まああてはまる」への回答。以下同)、「学生生活に適應できなかったから」63.8%、「単位が取れず卒業できそうになかったから」56.2%となっている(王ら, 2016)。そして、これらの中退経験者は、在学中にどのような支援があれば中退しなくて済んだと考えるかという問いに対しては、「その他」を除くと、1位「心理相談」31.6%、2位「授業料免除」21.6%、3位「学習支援」21.2%と回答しており(同, 2016)、学生生活や学習に関して相談しやすい場が用意されていることが中退防止には必要不可欠であることがうかがわれる。

もちろん、現在、各大学では、学生が退学に至るのを防ぐために、「学生相談」の体制整備、「クラス担任制度/アカデミック・アドバイザー」の設置のほか、「初年次教育やゼミ・演習形式の授業での支援」「情報の共有/学部・部門間の連携」「保護者との連携・対応」「経済的支援」など、様々な体制を整え対策を講じている(河合塾, 2015)。日本学生

支援機構の調査では、学生相談に対応する組織・人として、「学生の相談に対応する独自の組織（学生相談室等）」（大学85.8%、短期大学79.2%）、「保健管理センターや保健室など」（同75.1%、68.1%）、「クラス担任、指導教員等の教員」（同72.9%、77.2%）、「学生部（課）等の事務組織」（同72.3%、64.8%）等をあげており、6割以上の大学が学生相談体制を整えている（日本支援機構、2022）。しかしながら、「学生相談に関する今後の課題として特に必要性が高いと思われる事項」として、「悩みを抱えていながら相談に来ない学生への対応」への回答割合が最も高いうえ（大学87.7%、短期大学84.0%）、前回調査から大学6.6ポイント、短期大学6.2ポイント、回答割合が高くなっている（同、2022）。つまり、中退に至る学生が欲している相談の場の整備は、現状ではまだ十分ではなく、学生が相談にくることを「待つ」体制から、大学側から積極的に関係を構築して相談できる関係をつくり「行く」体制が必要であることも推察できる。そしてすでに、桜美林大学ビジネスマネジメント学群のように、新入生を少人数クラスに分け、そのクラスの基礎演習授業をクラス担任が行うことで学生の入学直後からの諸問題に対応する制度や、関西外国語大学のように、クラス担任が年間に3度の懇親会を実施して、出欠状況も含めた学生の生活、学習の状況を確認しながら助言や指導を行っていく制度を設けているような大学もいくつもみられる（河合塾、2015）。

本学も、より積極的な学生支援体制を構築していくために「キャンパスアドバイザー制度」を2022年度よりスタートした。学生のためのよりよい学生支援体制になるよう、本稿では「キャンパスアドバイザー制度」を検証し、その課題を明らかにしていく。

1. 制度の概要と検証方法

1. 概要

本制度の実施期間は入学直後の4月から後期開始直前の9月までの約半年間である。新入生を学科ごとに約20名ずつのグループに分け、短大職員ほぼ全員と共通教育担当部署である総合教養センター所属の専任教員および助手がキャンパスアドバイザーとしてそれぞれ1つのグループを担当した。総合教養

センター教員は同時に各学科のキャンパスアドバイザーをまとめるグループリーダーを兼務し、各アドバイザーと常に情報を共有し、どのグループも統一した学生支援が保たれるような体制を整えた。その情報は、随時各学科長にも共有し、必要があれば、協力して学生指導に当たれるようにした。グループ分けに当たっては1年後期にスタートする学科ゼミナールの所属希望調査をもとに、目指す進路の比較的近い学生で構成することとした。また、このグループを1年前期の必修科目「戸板ゼミナール1」における産学連携プロジェクトでも用いることで、学生たちにグループのメンバーと協働して学ぶ場を提供し、相互に作用し合いながらコミュニケーション力や結束力を高めていけるよう工夫した。

2. 具体的な活動内容

キャンパスアドバイザーは入学直後からそれぞれの学生に寄り添う形で活動をはじめたが、主な内容として以下のようなものが挙げられる。

表1 キャンパスアドバイザー業務内容

入学式での担当者紹介および当日中に担当者から各学生にお祝いメールの送信
学科オリエンテーション（履修ガイダンス）への参加
個別面談（前期開始直後と終了前の2回）
担当学生全員とのグループミーティング（月2回→後半は月1回に変更）
学内行事・各種アクティビティの周知
学内ポータル上での出欠確認、欠席の多い学生個人および保護者への連絡と記録
総合教養科目「戸板ゼミナール1」への協力
① 学生のグループ活動へのサポート
② 授業で各学生が作成した Google サイトのデータを共有し、進捗度をチェック
③ 成果発表会であるプレゼンテーション大会の予選進出と、決勝への参加
学生生活全般に関する質問および相談対応
担当者ミーティング（月1回）

3. 検証方法

学生及びキャンパスアドバイザーそれぞれにアンケートを実施し、制度に対する振り返りを行った。その結果を分析し、制度の有効性と問題点を探る。昨年まで実施していたクラスアドバイザー制度を踏襲している部分もあり、学科ごとに実施方法に若干の違いがあることから、今回の考察は学科ごとに行うこととする。アンケートの実施時期と内容は以下の通りである。以下、CAはキャンパスアドバイザーを示す。

【学生へのアンケート】

2022年7月21日に、短大教務部より以下の質問をメールにて全1年生に配信し、Google Classroomから回答を回収した。

タイトル：「学生アンケート（キャンパスアドバイザーについて）」

1. 個別相談の回数について
 - ①もっと回数を増やした方が良い
 - ②ちょうどよかった
 - ③回数は1回以下でよい
- ①と回答の方、何回くらいが適当だと思いますか？
2. CAの態度について
 - ①相談しやすい態度であった
 - ②普通
 - ③話しかけづらい態度であった
3. CAの対応について
 - ①丁寧な対応だった
 - ②普通
 - ③対応があまり良くなかった
- ③と回答の方、具体的にどんな対応をとられましたか？
4. CAへの感想、もしくはもっと期待することがあれば、お書きください。

【キャンパスアドバイザー（教職員）へのアンケート】

前期キャンパスアドバイザー業務終了後に、以下の質問を総合教養センターより配信し、Google Classroomから回答を回収した。

タイトル：「〇〇学科CA（キャンパスアドバイザー）ふりかえり」

1. CA業務として行ったことには、主に以下のようなものがありました。現状のやり方に課題があると思うものにチェックをお願いいたします。（複数回答可）
 - ①4月学科オリエンテーション参加（履修指導）
 - ②個人面談（5月GW前、6月下旬）
 - ③グループ面談（原則月1回）
 - ④産学連携（「戸板ゼミナール1」）：学生のデータ

¹戸板女子短期大学では2022年度より、毎週火曜日と木曜日の5限目をTOITA Activityの時間とし、各種検定や就職に向けた対策講座や、その他もろもろの活動をするための時間として設けている。自由参加の講座がほとんどであるが、一人でも多くの学生の参加を促すため、授業時間に組み込むこととした。

を各キャンパスアドバイザーと共有

- ⑤産学連携（「戸板ゼミナール1」）：予選6/23授業参加（タイムキーパーと進行）
 - ⑥産学連携（「戸板ゼミナール1」）：決勝7/14授業参加
 - ⑦担当学生の出欠チェック（原則週1回）と指導
 - ⑧「出席」要注意学生のスプレッドシート入力
 - ⑨担当学生について込み入った内容はアクティブポータルへ入力
 - ⑩TOITA アクティビティ¹の告知（月1回）
 - ⑪CA全体ミーティング
2. 1でチェックしたものについてのご意見・改善案などを自由にお書きください。
 3. 1以外の今回のCA業務、その他について何かありましたらご自由にお書きください。
 4. その他：ご自由にお書きください。

II. 学科ごとの結果と考察

1. 【服飾芸術科】

（1）学生へのアンケート結果と考察

表2 学生へのアンケート結果（服飾）

	質問内容	選択肢	服飾 (n=113)	
1	個別相談の回数について	もっと回数を増やした方が良い	3	2.7%
		ちょうどよかった	102	90.3%
		回数は1回以下でよい	8	7.1%
2	CAの態度について	相談しやすい態度であった	99	87.6%
		普通	14	12.4%
		話しかけづらい態度であった	0	0.0%
3	CAの対応について	丁寧な対応だった	99	87.6%
		普通	14	12.4%
		対応があまり良くなかった	0	0.0%

服飾芸術科在籍者 195名（9月1日付）のうち、アンケート回答者は113名で、学科在籍者の57.9%の回答率であった。上記の結果から分かる通り、学生から挙がったキャンパスアドバイザーの態度や対応に関する項目についての第1位（いずれも87.6%）は「相談しやすい態度であった」、「丁寧な対応だった」といずれも好意的なものであった。自由記述欄

への記載についても「とても話しやすく、個人面談の時は楽しくお話しできてよかったです。」というような感想が最大公約数的であった。

なお、アンケート回答者113名中、48名(42.5%)の学生が「CAへの感想、もしくはもっと期待することがあれば、お書きください。」の自由記述欄に回答しているが、以下の言葉の使用が目立った。

表3 記述回答における頻出語の割合(服飾)

頻出語	使用した人数 (n=48)	使用率	文中に続く単語・使用例
話しやす	15	31.3%	…やすい
相談	15	31.3%	…にのってもらう
聞いて	12	25.0%	…くださる
ありがとう	12	25.0%	
親身	8	16.7%	
面談	8	16.7%	
優し	6	12.5%	…いい
嬉し	5	10.4%	…しかった
不安	4	8.3%	

話しやすいという評価が回答者48名中15名(31.3%)いた。中でも「とても話しやすい」という表記が多く、学生にとってキャンパスアドバイザーが親しみやすい存在になれていたことが推測される。また、「相談」も同率の15名だった。この内容から、新入生が短大生活をスタートする際に全体像が見えないために生ずる心理的な不安を、キャンパスアドバイザーとの面談等によっていくらか解消できたことがうかがえる。キャンパスアドバイザーから勉強面以外にも生活面、交友関係などさまざまな側面から支援されることは、初年次前期を送る上では学生にとって重要なのであろう。

今回は好意的な回答結果になったが、学生側が本音を伏せたまま回答した可能性もある。今後アンケートを取る際には質問肢の内容をより細かくして増やすなど、検討する必要があるだろう。

(2) キャンパスアドバイザー(教職員)へのアンケート結果と考察

表4 キャンパスアドバイザーへのアンケート結果(服飾)

現状のやり方に課題があると思うCA業務	服飾(n=11)	
1 ① 4月学科オリエンテーション参加(履修指導)	1	9.1%
② 2個人面談(5月GW前、6月下旬)	2	18.2%
③ グループ面談(原則月1回)	7	63.6%
④ 産学連携(「戸板ゼミナール1」) 学生のデータを各キャンパスアドバイザーと共有	2	18.2%
⑤ 産学連携(「戸板ゼミナール1」) 予選6/23授業参加(タイムキーパーと進行)	2	18.2%
⑥ 産学連携(「戸板ゼミナール1」) 決勝7/14授業参加	1	9.1%
⑦ 担当学生の出欠チェック(原則週1回)と指導	2	18.2%
⑧ 「出席」要注意学生のスプレッドシート入力	0	0.0%
⑨ 担当学生について込み入った内容はアクティブポータルへ入力	1	9.1%
⑩ TOITA アクティビティの告知(月1回)	4	36.4%
⑪ CA全体ミーティング	0	0.0%

同制度を教職員側から見た場合、課題があるとされたものは服飾では大きく2つある。まずひとつ目は「グループ面談(原則月1回)」であり、その具体的理由には以下のようなものがあった(原文のまま)。「5月以降はある程度友達のグループができているため、グループ面談は初回(4月)のみでも良いと思いました。」「実施する明確な目的が分からない事と発信事項があまり無い(特に個人面談 終えた月の回)。」、「個人面談で十分コミュニケーションが取れているので、あまり頻繁に行うとかえって学生にうるさがられてしまうのではないかという心配がある。」「グループ面談は、重要な伝達事項がないと、参加しても意味がないと思われ、参加率が下がってしまうと思います。」。

まとめると、個別面談も行っているためグループ面談にはそこまでの必要性が感じられない、ということである。かえって頻繁に行うことで煩わしさを学生に感じさせてしまう可能性もあり、本来のこの制度の目的のひとつである中退予防につながらなくなる、という懸念を抱いたキャンパスアドバイザーが多かったようだ。

課題があるとされた二つ目は、「TOITA アクティビティの告知(月1回)」でありその理由として「アクティビティで何をやっているか分からない学

生が多かったので、特に案が無いので申し訳ないのですが、学生への告知方法がもう少し見やすく分かりやすくなると良いと思いました。」「アクティビティの周知が十分にできていない為、参加者が少ない企画が発生した。時間割や企画内容を含め検討が必要。」といったものがあった。

今年度スタートした TOITA Activity という制度は学生の反応を見つつの試行錯誤であった。毎月のイベント告知時期も変動するため、主幹部署より学生への告知依頼があっても「面談を済ませたばかり」であったり、「しばらく担当学生には会う機会がない」などタイミングの合わないキャンパスアドバイザーもあり、対面告知よりも伝達効果の低いメールで案内することも多かったようだ。『キャンパスアドバイザーから周知のこと』という依頼が主幹部署、キャリアセンター、総合教養センターから重要度も内容も別々のタイミングで来るため伝達しにくい。どの程度重要な事柄かもキャンパスアドバイザーにはわかりにくい為、できたら主幹部署からの伝達を基本として、『CA から周知』はなるべく避けていただきたい。」という意見があったように、キャンパスアドバイザー側のやりにくさや不安を取り除くことも、今後の改善点として挙げられるだろう。

ほかにも「担当学生の出席チェック（原則週1回）と指導」という、中退予防を目的とするこの制度の肝となる業務について、「前期は所属部署の繁忙（営業）時期で外出も多かったため毎週の追いかけは業務的にかなり無理が生じた。」と、職員の所属部署によっては時期的にこの制度への注力が困難というものがあつた。各部署でこれに類することは往々にしてあるだろう。こうした小さな「やりにくさ」は積み重なると、制度全体に影響を及ぼす可能性もある。キャンパスアドバイザー同士で声を掛け合うように促してもお互い遠慮が先に立ってしまうことが予想されるため、仕組みづくり等、今後課題を乗り越えるための工夫が望まれる。

また、中退予防策としての「出席チェック」は、特定の授業において以下のような意見もみられた。「6月の面談の際4月分しか出欠の入力がされておらず、こちらで欠席の確認ができない為、心配でした。お忙しいとは思いますが、先生には入力をあまりため

ないで頂けると助かります」。これはコロナ感染対策の一環としてオンデマンド授業を行った科目に見られたのだが、前期中に課題を提出すれば授業後でも出席となるという規則であったため、長期間出欠入力力が保留となっていたことが原因と推察できる。解決策として、オンデマンド授業の担当教員には事前に出席チェックの重要性の理解を促し早期入力の協力依頼をすること、課題提出の規則を出席チェックとは切り離して用意してもらうなどが考えられる。

0回答であった「出席要注意学生のスプレッドシート入力」、「CA 全体ミーティング」については「課題がない」と受け止めるのではなく、今回は課題は表面化しなかったが、今後よりよいかたちで業務に携われる工夫をし続けていく必要があるだろう。自由記述の中に「キャンパスアドバイザーとしてのスキルアップのため『キャンパスアドバイザー研修』が必要である」というものがあつたが、この制度を実施し表面化した具体的な事例を省察しつつ、今後さらなる改善を行っていくことが肝要であろう。

2. 【食物栄養科】

(1) 学生へのアンケート結果と考察

表5 学生へのアンケート結果（食物）

	質問内容	選択肢	食物 (n=96)	
			人数	割合
1	個別相談の回数について	もっと回数を増やした方がよい	4	4.2%
		ちょうどよかった	91	94.8%
		回数は1回以下でよい	1	1.0%
2	CAの態度について	相談しやすい態度であった	84	87.5%
		普通	12	12.5%
		話しかけづらい態度であった	0	0.0%
3	CAの対応について	丁寧な対応だった	86	89.6%
		普通	8	8.3%
		対応があまり良くなかった	0	0.0%
		空白	2	2.1%

食物栄養科在籍者155名（9月1日付）のうち、アンケート回答者は96名で、学科在籍者の61.9%の回答率であった。これを仮にキャンパスアドバイザーが半年間存在したことに對する学生にとっての関心度としてみた場合、正負のイメージは在籍者全体で測れないものの、在籍者の半数以上が意識下に存在を感じていたと言える。

食物栄養科のキャンパスアドバイザーにおける個別面談は、4月下旬より5月下旬（一部6月上旬）までの学期初頭と、6月下旬より7月下旬までの学期末に実施した。休学者退学者を除く全員が最低2回はキャンパスアドバイザーと面談を経験したわけであるが、面談回数の適切さとしては、アンケートにおいて96名中91名（94.8%）が「ちょうどよかった」と回答しているところから、適度な接触回数であると言える。なお、学生によってはさらに多くの面談を受け、キャンパスアドバイザーから支援を得た、あるいは指導を受けたという学生もいる（Activeポータルの記録より確認）。このようにキャンパスアドバイザーは、定期面談の他、学生から求められれば適宜個別の面談も実施した。さらに、出席に関する確認も定期的に行い、欠席が目立つ学生においてはメールや電話にて状況を確認し、相談の対応や出席の促しを行った。そうした支援・指導の際のキャンパスアドバイザーの態度に対しては、96名中84名（87.5%）が「相談しやすい態度」であったと感じている。また、対応についても「丁寧な対応だった」との回答が96人中86名（89.6%）であることから、少なくとも在籍者数155名の54.2%～55.5%（84名～86人）の学生にとっては、学校生活支援者としての役割の一端を担えたといっていよいだろう。

なお、アンケート回答者96名中52名（54.2%）の学生が「CAへの感想、もしくはもっと期待することがあれば、お書きください。」との問いに対し、書き込みを行ったが、内容として、以下の言葉が頻出していた。

表6 記述回答における頻出語の割合（食物）

頻出語	使用した人数 (n=52)	使用率	文中に続く単語・使用例
話しやす/話しかけ	17	32.7%	…やすい
相談	16	30.7%	…にのってもらう
優し	10	19.2%	
丁寧	7	13.4%	…な対応・…に聞いてくれた
親身	6	11.5%	
ありがとう	6	11.5%	
嬉し	5	9.6%	…してくれて嬉しかった
不安	5	9.6%	解消した・減った・和らいだ
悩み	4	7.7%	

先述のアンケートの選択肢の影響とも考えられるが、話しかけやすい・話しやすいという評価が回答者52名中17名（32.7%）いた。学生にとっては「話しやすい」存在であり、相談にのってもらえたことがキャンパスアドバイザーの価値であったと読み取れる。記入内容の多くに感謝の意が示されていたが、1名だけ「就職についてももっと相談を聞いてほしい」という、より強い要望を述べた学生がいた。前学期ということもあり、キャリアに関することは本人の希望や意志を確認するまでに留められていたため、就職意識の高い学生にとっては、それだけでは物足りなさを感じたのではないかと考えられる。

（2）キャンパスアドバイザー（教職員）へのアンケート結果と考察

表7 キャンパスアドバイザーアンケート結果（食物）

現状のやり方に課題があると思うCA業務	食物 (n=6)	
1 ① 4月学科オリエンテーション参加（履修指導）	1	16.7%
② 2個人面談（5月GW前、6月下旬）	1	16.7%
③ グループ面談（原則月1回）	5	83.3%
④ 産学連携（「戸板ゼミナール1」） 学生のデータを各キャンパスアドバイザーと共有	2	33.3%
⑤ 産学連携（「戸板ゼミナール1」） 子選6/23授業参加（タイムキーパーと進行）	0	0.0%
⑥ 産学連携（「戸板ゼミナール1」） 決勝7/14授業参加	0	0.0%
⑦ 担当学生の出欠チェック（原則週1回）と指導	2	33.3%
⑧ 「出席」要注意学生のスプレッドシート入力	1	16.7%
⑨ 担当学生について込み入った内容はアクティブポータルへ入力	1	16.7%
⑩ TOITA アクティブティビの告知（月1回）	1	16.7%
⑪ CA全体ミーティング	1	16.7%

キャンパスアドバイザーへのアンケートの回答率は全8名中6名で回答率は、75.0%であった。アンケートの結果、6名中5名（83.3%）が「放課後クラスルーム」と呼んでいた毎月1回担当学生全員を集めて行うグループ面談の開催意義について課題を感じていた。キャンパスアドバイザーミーティングにおいても「グループ面談で何をやったらよいかわからない」「学生がグループ面談に出席しない」といった意見が頻出した。

グループ面談で何をすべきかという「やるべき材料」を主幹部署から各キャンパスアドバイザーに提供したとしても、その根本的な意義や価値を見出さ

なければ「欲しくない菓子袋」ができてしまうことになる。大学生にとって、学校が決めたグループで定期的集まる価値はどこにあるのか、またそれは学生たちが本当に求めているものと一致しているのか、学生たちにとって本当に必要な空間や時間であるのかを調査分析し、議論せねば、この課題の真の解決にはならないであろう。そうした議論を重ねることで、提供する側の意義づけや価値づけが明確にできるのであり、各自が自信をもって場や時間を学生に提供できると言えよう。

以上の結果を踏まえてこの制度を考察するならば、食物栄養科では、対学生のアンケートからわかるように、8人のキャンパスアドバイザーが、前学期の間「親身」になって「丁寧に」学生支援ができていたと判断する。しかしながら、就職の相談をもっとしたいという思いを抱いた学生がいるように、キャンパスアドバイザーに求めるものが多種多様であったことは事実である。

食物栄養科では年度初頭の学科会議においてキャンパスアドバイザーの役割は「学生の生活を見守ること」と定義したため、総じて学生アンケートからもわかるように学生の傍に立って生活の支援をするという役割に努めたことが推測される。

しかしながら、それを「指導」という分野まで定義を広げたとすれば、出席が不足している学生に対し、現状の聞き取りはできていても指導までできていたのかということ、それは今回のアンケートだけでは分析と判断はできない。このキャンパスアドバイザーの役割定義は、その価値を決定づけると共に、支援の効果を分析する際の重要な要素になることは言うまでもない。

今後職員スタッフが担うキャンパスアドバイザーに「指導」の定義を含ませるのであれば、「指導」のための職員研修が必須となる。また心理的な不安を抱える学生に対する支援方法なども必要である。出席日数や評価を追うだけでは理解できない学生の内面を「相談支援」を通して捉えることがキャンパスアドバイザーの役目だとすれば、それは一つの技術であり、その技術を育成する環境を整えることが最優先だと思われる。

3. 【国際コミュニケーション学科】

(1) 学生へのアンケート結果と考察

表8 学生アンケート結果（国際）

	質問内容	選択肢	国際 (n=73)	
1	個別相談の回数について	もっと回数を増やした方がよい	3	4.1%
		ちょうどよかった	65	89.0%
		回数は1回以下でよい	5	6.8%
2	CAの態度について	相談しやすい態度であった	58	79.5%
		普通	15	20.5%
		話しかけづらい態度であった	0	0.0%
3	CAの対応について	丁寧な対応だった	57	78.1%
		普通	16	21.9%
		対応があまり良くなかった	0	0.0%

国際コミュニケーション学科在籍者 115名（9月1日付）のうち、アンケート回答者は73名で、学科在籍者の63.4%の回答率であった。未回答の学生がどのように判断しているかは計り知れないものの、回答者の93.1%が個別面談の回数が適当だった、またはもっと多くても良かったとの見方を示している。高校までとは大きく変わった学習環境や生活環境で相談の機会を必要としていたことが推察される。キャンパスアドバイザーには事前にスクールカウンセラーより「CAのための聴き手の心がまえ」が配布され、面談内容もある程度決められたものを用いることによって、まずは学生に寄り添い安心感を与えるところから始めた。小貫（2012）によれば、大学とは「学びの共同体」であり、学生の主体的な参加を引き出すためには、学生同士、教員と学生、職員と学生、そして教員と職員それぞれの相互作用を生み出すことが大切だということである。そしてその共同体の実現に向けては、Strange & Banning（2001）の提唱する「学習環境の3段階モデル」をたどる必要があるのだが、その最初の段階が「安全と包含」である。キャンパスを安全な学習活動の場として認識し、「所属と保証」が確立されていることを感じられるようになってはじめて学生たちはさまざまな活動への関与の気持ちが生まれるのだ（第2段階）。そうして自律的な学習者となった学生たちがコミュニティの中で相互作用の学びを繰り返すようになれば共同体の完成である（第3段階）。

今回の学生へのアンケート結果を見る限り、入学

後の早い段階でキャンパスアドバイザーという存在に出会ったことでまずは第1段階をクリア、前期が終了するころには第2段階目にコマを進めることのできた学生も少なくないようである。自由記述からも、最初はただ寄り添ってもらうだけの関係性だったものが、徐々に課外活動や将来に向けての相談を持ち掛けられるような信頼関係を築いていった様子がうかがえる。ただ、他学科の結果と比較してキャンパスアドバイザーの態度や対応に関して「普通」と答えた学生がやや多く、この学科の学生にはあまり関与されることを好まない傾向があるのかもしれない。学生の求める具体的な事柄やサポートの程度、関与の方法などを見極め、学科の特性に合わせて変化をつける必要もあるのではないかと考えさせられる結果であった。

なお、アンケート回答者115名中、44名(38.2%)の学生が「CAへの感想、もしくはもっと期待することがあれば、お書きください。」の自由記述欄に回答しているが、頻出する言葉を取り出したものが以下の表である。

表9 記述回答における頻出語の割合(国際)

頻出語	使用した人数 (n=44)	使用率	文中に続く単語・使用例
話し	9	20.4%	…やすい…かけて
相談	9	20.4%	…にのって…しやすい
ありがとう	9	20.4%	
聞いて	9	20.4%	たくさん・いつも
親身	7	15.9%	…になって…聞いて
楽し	7	15.9%	過ごせた…かった
優し	5	11.3%	…く話しかけ…かった
よかった	3	6.8%	
丁寧	2	4.5%	…く答えて

キャンパスアドバイザーの大きな役割の一つに、学生に寄り添い抱えている問題や悩みを解決に導くというものがある。このデータを見る限り、どのキャンパスアドバイザーも学生とよく話し、親身になって相談に乗るよう心がけていたことが伺える。少なくとも否定的なコメントは1件もなかったことを鑑みると、まずは支援者として、学生と最低限の関係性を築くことができたと言えるのではないだろうか。20%を超える学生からの「ありがとう」の言葉が今

後のキャンパスアドバイザーとしての活動に向かう原動力になることは間違いない。

(2) キャンパスアドバイザー(教職員)へのアンケート結果と考察

表10 キャンパスアドバイザーへのアンケート結果(国際)

現状のやり方に課題があると思うCA業務	国際(n=7)	
1 ① 4月学科オリエンテーション参加(履修指導)	1	14.3%
② 2個人面談(5月GW前、6月下旬)	1	14.3%
③ グループ面談(原則月1回)	4	57.1%
④ 産学連携(「戸板ゼミナール1」) 学生のデータを各キャンパスアドバイザーと共有	6	85.7%
⑤ 産学連携(「戸板ゼミナール1」) 予選6/23授業参加(タイムキーパーと進行)	2	28.6%
⑥ 産学連携(「戸板ゼミナール1」) 決勝7/14授業参加	2	28.6%
⑦ 担当学生の出欠チェック(原則週1回)と指導	1	14.3%
⑧ 「出席」要注意学生のスプレッドシート入力	1	14.3%
⑨ 担当学生について込み入った内容はアクティブポータルへ入力	1	14.3%
⑩ TOITA アクティビティの告知(月1回)	3	42.9%
⑪ CA全体ミーティング	1	14.3%

国際コミュニケーション学科についてはキャンパスアドバイザー7名全員から回答を得たが、興味深い点として、その中の6名(85.7%)が④の「産学連携(「戸板ゼミナール1」)学生のデータを各キャンパスアドバイザーと共有」に問題を感じていた点である。先述したように、これは学生が授業内で指導を受けた後、毎時間終了時にパソコンで作成するGoogleサイトを、キャンパスアドバイザーが担当する学生全員と共有し、進捗状態をチェックする業務である。学生にとって大変なのはもちろんだが、キャンパスアドバイザー自身も一度レクチャーを受けただけで普段あまり使用しないアプリケーションであったため、なかなかイメージをつかめず苦労したことが自由記述の感想からうかがえる。仕上がりの見本を共有するなどの工夫が必要であった。また慣れない作業に時間がかかるため、「通常業務に追われそこまでチェックができなかった」との回答も複数みられた。「産学連携」の補助については、Googleサイトのチェック以外にもできる限りの参加をお願いしていたが、キャンパスアドバイザーが関与する度合いによって出来栄が左右してしまうことに責任を感じるという意見も聞かれた。「産学

連携」は学校を挙げてのプログラムとなっているため多岐にわたる協力を依頼したが、あくまでも通常業務の時間内であり、どの程度までかかわってもらうかについては今後しっかりと決めておくことが必要である。また、「産学連携」は学科ごとに違うプログラムを展開しているため、キャンパスアドバイザーよりも学科の教員あるいは助手をメインのサポーターとするほうが良いのではないかという意見も出された。業務の内容や分担についても大きな課題の残る結果であった。

問題があったと感じた業務で2番目に回答数の多かったものは、他学科の結果と同様に③の「グループ面談」で7名中4名(57.1%)となっている。特に国際コミュニケーション学科で問題視されたのは開催時間についてである。基本的には火曜日または木曜日の5限目に設置されている TOITA Activity の時間に行くことを想定していたが、時間割の関係上、どちらも相当数の学生にとって複数の空き時間の後となってしまう、呼びかけても学生が集まらないという問題が生じた。「グループ面談の時間はお昼休みに設けたほうが良いのではないか。放課後だと学生が集まらない。集まったとしても、せいぜい50%程度。」「回数や時期を決めず適宜面談を行うほうが、もっと信頼関係が築けたのではないだろうか。」といった意見が多く出され、キャンパスアドバイザーミーティングでの話し合いを経て、5月後半からは開催時期も時間帯も各グループに任せることとした。それでも、アンケートの記述を見る限り、個別面談の実施や、毎週の「戸板ゼミナール」における協働活動などを理由に、グループ面談の必要性を感じないという意見が根強かった。不必要な業務を減らし、各担当者の負担を少して軽くする方法を考えることも主幹部署として忘れてはならない視点である。

Ⅲ. 全学科の結果をふりかえって

1. アンケートから見える気づき

今回のアンケートを通して、普段学生とあまり直接的な接点を持たない職員を中心に、「さまざまな学生の現状を知る良い機会となった」という声が数多く聞かれた。学生広報スタッフや学生会などで活躍する所謂「目立つ」学生たちの様子は見えても、

その陰に隠れている多くの「普通の」あるいは「目立たない」学生の存在を学内のすべての人に周知できたこと、その中には学習面や心理面でのサポートを必要としている者や、モチベーションの低い者が少なくないという実情を共通の認識としてとらえ、その解決に向けた取り組みを共に考えられるようになったことは何よりの成果であった。そのような学生たちと絆ができたのも束の間、後期は学生指導の主幹が各学科へと移行する。キャンパスアドバイザーの中からも「今後も指導に関わっていくべきでは」との意見も出ているが、短大という短い在学期間の中で、専門教育や就職活動が開始される時期が来た以上、それは当然のことである。しかし一度できた絆をあえて切る必要はない。学生を見守る目が増えたと捉え、相談の内容によって学生が相談の相手を選択できるようになると考えれば、この上ないメリットである。確実に情報を引継ぎ、多くの目で学生を見守る体制が確立できたときに、初めてこの制度の有効性が証明されるはずである。

2. アンケートから浮かび上がった問題点

一方で、今回のアンケートを通して様々な問題点も浮き彫りになった。先述した学科毎に生じた問題点に加えて、どの学科のキャンパスアドバイザーからも共通して聞かれた問題点には以下のようなものがある。

1. 今回のキャンパスアドバイザー制度では情報共有のしやすさから、同じ部署の職員が同じ学科を担当しているケースが多かった。その結果、ミーティングで部署全員が抜けてしまうことになり業務が滞ったり、他学年の対応に支障が出たりした。検討が必要である。
2. 担当者によってサポートの程度やグループ活動に差が生まれた。活動の範囲や方法をある程度統一しておくほうが良い。
3. 授業の出欠に関して、頻繁に連絡しすぎると学生が負担に感じてしまう可能性がある。注意や連絡のタイミングは担当のキャンパスアドバイザーに一任するべきではないか。
4. 課題未提出者の追跡に関しては、どこまでキャンパスアドバイザーが担当するのか線引きが必要で

ある。ただし、基本的には各授業担当者が行うこととする。

5. 担当学生数が多い。半期に2回の個人面談やグループ面談、授業サポートなどしなければならないことが多く、通常業務に支障が出ることもある。また、担当人数が少なくなれば、より頻繁に各学生とコミュニケーションを取りやすくなる。(理想は10名位)

おわりに

キャンパスアドバイザー制度の初の試みでは、アンケートの回答から新入生の本音が垣間見られただけでなく、教職員にとっての新たな気づきや課題も浮き彫りになった。これらのすべてが今後の指標となっており、更なる制度の充実につながることは間違いない。少なくとも、最初に述べた全国の大学・短期大学の抱えている問題のひとつ「悩みを抱えていながら相談に来ない学生への対応」に関しては、導入初年度にして解決の糸口をつかんだと言える。今後、今回明らかになったその他の問題点をひとつひとつクリアしながら、全職員と総合教養センター、そして各学科の教職員が三位一体となって学生をあらゆる角度からサポートできるようになれば、この制度の完成も近づくことだろう。将来の日本を背負っていく人材を育成する最後の教育機関として、今回の調査はこれまで以上にその責任を重く受け止めるきっかけとなった。

参考文献

・文部科学省(2022) 大学等における令和4年度前期の授業の実施方針等に関する調査及び学生の修学状況(中退・休学)等に関する調査の結果について(周知)「学生の修学状況(中退者・休学者)等に関する調査(令和3年度末時点)」

https://www.mext.go.jp/content/20220603-mxt_kouhou01-000004520_01.pdf (2022年12月30日取得)

・王傑ほか(2016)「中退者調査」, 小林雅之編『平成27年度 文部科学省大学改革委託推進事業「経済的理由による学生等の中途退学の状況に関する実態把握・分析等及び学生等に対する経済的支援の在り方に関する調査研究」報告書』, 第6章, p.251

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/_icsFiles/afieldfile/2016/08/02/1371455_2.pdf

・王ら(2016) 前掲書, p.258

・河合塾(2015)「退学・除籍者数を少なくする取り組み」『Guideline 2015 特別号』p.60-62

・日本学生支援機構(2022) 大学等における学生支援の取組状況に関する調査(令和3年度(2021年度)) 結果報告(2023年1月2日取得), p.71

https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_torikumi/_icsFiles/afieldfile/2022/12/20/1_kekka_1.pdf

・日本学生支援機構(2022), 前掲書, p. 79-80

・河合塾(2015) 前掲書, p.61

・安部有紀子(2011)「学生の学びを支援するために」学術情報リテラシー教育担当者研修 2011年10月20日:大阪大学

・C. Carney, Strange., and James, H. Banning. (2001) "Educating by Design: Creating Campus Learning Environments That Work"

謝辞

調査にご協力くださいました短大教務部、学生部、およびIR室、並びにキャンパスアドバイザーをお引き受けくださった教職員の皆様にも、この場をお借りして深く御礼申し上げます。